

# 日本IT書紀

068 寂寥

04 含牙篇  
卷之九 修羅

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第六十八

寂寥

一

ミッドウェー海戦を境にアメリカ軍の劣勢挽回に勢いがついていたのは事実だった。しかしアメリカ軍は、この時点ではまだ

——優勢になった。

とは判断していなかった。

対して日本軍、とくに海軍は意気消沈し、次善の策を講じることすらできなかった。山本五十六が乾坤一擲の総兵力で臨んだ艦隊決戦に、戦艦や重巡洋艦などが参加しないまま、主力空母の半数を失ってしまった。そのショックがあまりにも強烈だったのだ。

海戦に参加した将兵には緘口令がひかれ、他の部隊より優先的に激戦地に送り込まれた。日本の大本営は緘口令のうえ、口封じをした。

『機密戦争日誌』七月十三日付

近來戦争指導活発化せず。ミッドウェー以来、海軍の海軍本位的威勢よき積極論を聞かざるも亦寂寥。

一方、パプアニューギニアのポートモレスビー攻略作戦は着々と進められていた。六月十六日、ガダルカナル島に連合艦隊の第十一設営隊、七月一日に第十三設営隊が上陸して、ルンガ川のほとりに飛行場を建設し始めた。これに對してアメリカ軍は陸海軍共同によるソロモン諸島奪還を計画し、七月十日に「ペスト」と名づけた作戦を發動した。八月七日、ガダルカナル島に向けて最初のアメリカ軍部隊が発進した。当初予定された攻撃部隊第一海兵師団の兵力は一万九千人だったが、一個連隊をサモア島に振り向けられ、実質的には二個連隊に過ぎず、これをツラギ島とガダルカナル島に分けると、それぞれに上陸させるのは一個連隊に過ぎなくなる。

しかも兵装は旧式で、アメリカ本土から三週間前に到着した新兵が中心だった。つまり、訓練を十分に受けていない緒隊の寄せ集めだった。本気で反攻基地を確保しようとしたのでなく、いわば日本軍の出方を探るための武力偵察に近い。

ガダルカナル島の日本軍守備隊(約二千四百人)は、それを「アメリカ軍の反攻」と早合点し、ジャングルの中に

逃げ込んでしまった。反対にツラギ守備隊七百人は上陸してきた六千人のアメリカ陸戦隊に真正面からぶつかり、捕虜二十三人を出して全滅してしまった。

「ランチェスター戦略モデル」をもつてすれば、ガダルカナル島の日本軍守備隊は水際で粘り強く戦い、ツラギ島守備隊はゲリラ戦に持ち込むべきだった。

同日午前十時半に、「ペスト」作戦を展開中の第一海兵師団通信部は

——STOより。二十四機の雷爆撃機、貴地に向かう。という通報を得た。

STOというのは、太平洋の島々にアメリカ軍が配置した監視員の符号である。

この通信はボルネオ島のポートモレスビーで受信され、タウンズビル（オーストラリア）↓キャンベラ↓ハワイのルートでアメリカ海軍太平洋艦隊司令部に届けられた。

太平洋艦隊司令部はただちにガダルカナル沖に遊弋中のオーストラリア海軍重巡洋艦「キャンベラ」に緊急を知らせ、艦隊は戦闘準備を整えることができた。

飛来した日本の陸上攻撃機二十七機のうち五機、艦上爆撃機九機のうち五機、零戦十七機のうち二機が、翌日も同じ方法で陸上攻撃機二十三機のうち十八機、零戦二十五機のうち二機が、それぞれ撃墜されている。

この通信網は以後も継続して活用され、日本の航空機は出撃するたびに的確な迎撃機や対空砲火に遭遇して大きな損害を出した。これに対して日本軍は、事前に迎撃機が舞い上がっている、高度の違いから侵入する連合軍機を見逃し、陸上施設や艦船への爆撃を許している。

以後のガダルカナル島の戦いを詳述するのは、本書の目的ではない。概略をいえば、アメリカ軍の物資陸揚げ中に日本艦船が襲撃した第一次ソロモン海戦は日本軍が勝った。このとき陸軍参謀本部は「ガ島に人質を取った」と喜んだ。ところが上陸した一木支隊、第三十五旅団の攻撃が失敗した。陸上部隊を救援するために出向いた艦隊がアメリカ空軍と潜水艦によって沈められた。何度試みても結果は同じだった。

三万五千人の兵士が孤立した。人質を取られたのは日本軍だった。

## 二

『機密戦争日誌』はこの間、次のように記す。

九月十日付

海軍勝手な作戦而も拙劣なる作戦をやり不経済油の使用

をやり今更油が足りぬ故民需特配を中止するが如きは無責任も甚だし。海軍も充分右責任を感じある如きも、現実には石油なきを如何せん。ソロモン海戦尚逆睹し難く連合艦隊主力未だラホールにある現状に於いて特に然るべし。海軍今日の苦境すべてミッドウェー海戦に起因す。

十月二十六日付

ソロモン方面陸軍戦況全く頓挫せり。然るところ海軍作戦は意外進展しありて同慶に堪えず。第一部長、開戦以來未だ嘗てなき屈辱を感じずと述懐せらる。総長の陛下に対し奉る心中をお察しし陸軍統帥部の苦衷言わん方なし。

大本営は、適切な戦局の分析ができていなかった。情報の客観的な分析と、様々な条件のもとの柔軟な作戦の変更に対応する機能が、日本軍には欠けていた。また繰り返しになるが、物資の輸送と補給の重要性に気がついていなかった。

インパール作戦でもそうだったように、日本陸軍の物資調達に現地主義が貫かれた。すなわち占拠した土地の物品を掠め奪い、武力をもって強奪し、駐屯先を耕し作物を得るのである。十五世紀のチンギス・ハンの戦法と少しも違わない。

このためにガダルカナルでは物資の輸送に極端な消耗が強いられた。

一九四二年十一月二十五日から四三年一月三十日まで行われた日本軍による補給作戦は、駆逐艦六十九隻、潜水艦四十六隻などによって遂行されたが、送り込んだ食糧、弾薬、兵器など三千三百トンのうち、揚陸されたのは七百五十六トン、二二・九％に過ぎなかった。

七百五十六トンというのは決して小さな数字ではないが、このうち食糧は六百八十六トンであつて、同島に取り残された将兵二万八千人が二十八日間で食べつくしてしまう量なのである。そういういた緻密な計算がないまま日本陸軍は次々に兵団を送り、自らの首を絞めた。それは「皇軍は不敗である」という過信と面子のゆえだった。

とはいえ、日本軍によるガダルカナル島の撤兵は太平洋戦史に残る名作戦とされている。

指揮を執つたのは連合艦隊の山本五十六長官だった。

彼は同島の将兵が救出地に集合するよう、味方に対する欺瞞作戦を実行した。航空機をもって同島のアメリカ軍基地を攻撃し、反攻に出るように思わせた。さらに現地の司令部に、

——新たに上陸させる兵団と合せて敵を挟撃するのである。

という偽の情報を流した。

彼は駆逐艦二十隻を二隊に分け、一隊を橋本信太郎少将に、もう一隊を小柳富次少将に委ねた。

救援隊はそれぞれ単艦回避運動距離一キロの間隔をおいて二列縦隊で進み、途中、アメリカ軍の航空機四十機が攻撃してきたが、上空を掩護していた零戦三十機がこれを撃墜し、次に繰り出してきた魚雷艇部隊を橋本少将麾下の駆逐艦が応戦して炎上させ、二月一日午後十一時に同島エスペランス岬の四百メートル沖合いに到達した。これによって五千四百十四人が救出された。

同様の方式で二月四日に第二次救出作戦が行われ、四千九百九十七人が収容された。第三回目の救出作戦をめぐって、アメリカ軍に察知されているかどうか、議論が分かれた。駆逐艦艦長が鳩首し、決行が決まった。

二月七日、第三次救出作戦が敢行され、二千六百三十九人が運び出された。

駆逐艦二十隻による作戦行動がアメリカ軍に知られなかったはずはなかった。彼らは日本軍の暗号を解読して十分な情報入手していたが、太平洋艦隊の司令長官ニミッツは、山本長官の偽せ情報を信用した。つまり、日本軍は懲りずに、またぞろ大兵力をガダルカナル島に運んでいる、と思つたのだ。

——運べるだけ運ばせればいい。

と彼は考えた。

——日本の一個師団でもガダルカナル島に上陸してくれば、他の戦闘地域の脅威が減るであろう。このためアメリカ軍は日本の駆逐艦隊の行動を見て見ぬふりをした。

——頃合い。

と攻撃に出たアメリカ兵が見たのは、ゴミの山だった。

日本兵は一人も残っていなかった。

こうしてガダルカナル島はアメリカ軍の手中に落ちたが、なお、アメリカ軍は「優位」にはなかった。アッツ、マキン、タラワ、クエゼリン、ルオットといった諸島に日本軍の守備隊が頑張っていた。

戦況が一気にアメリカ軍有利に傾いたのは四四年六月以後である。欧州戦線で連合国軍がノルマンディ海岸に上陸してドイツ進攻の橋頭堡を築き、八月にパリが解放されたのだ。その結果、アメリカ軍は太平洋戦線にやや力を傾けることができるようになった。

### 三

アメリカ軍が日本軍の暗号をほとんど解読していたことは、戦後、明らかになっている。解読できるようになった

のは、外交文書については四一年四月から、軍事指令については四二年春ごろからであったとされる。

アメリカは日本が開発した暗号機とまったく同じ装置を作り出し、陸軍省と海軍省に二台ずつ、さらにロンドンに一台、フィリピン（フィリピン陥落後はオーストラリア）に一台を置いていた。日本がアメリカに宣戦を布告した際、駐米日本大使館の職員が暗号電を翻訳している間に、アメリカ政府は傍受した暗号をPCSにかけて解読してしまっていた。

また、連合艦隊司令長官・山本五十六が乗った海軍一式陸上攻撃機を撃墜したのも、暗号を解読した結果だった。開戦直後、ウェーク島海岸に沈没・着底した日本海軍駆逐艦「疾風」「如月」から発見した暗号書が決め手だった。

同じように、アメリカ太平洋艦隊は日本の連合艦隊司令部が四三年四月にトラックからラバウルに移ったこともつかんでいた。アメリカ軍にとって、ハワイ奇襲攻撃に始まる作戦指導力において、山本五十六は尊敬の対象であると同時に最大の標的でもあった。

——ヤマモトを排除することは、空母数隻を撃沈するのに等しい。

と彼らは考えた。

一九四三年の四月、山本長官は前線に展開する主要な日

本軍航空隊基地を訪問する計画を立てた。バレラ、シヨールランド、ブインの基地を訪れ、士気を鼓舞するのである。この計画は四月十三日に東南方面艦隊第十一航艦司令長官草鹿任一中将の名で「作戦特別緊急電報」として各基地に打電された。

アメリカ軍もその電波をキャッチしていた。

四月十七日、アメリカ海軍のノックス長官は、太平洋方面総司令官ニミッツ大将に、

——ヤマモトを撃て。

という極秘電を發した。ニミッツ大将はその指令を機動部隊司令官ハルゼー中将に伝え、ハルゼーは基地航空隊司令官であるマーク・ミッチャー少将に命令を出した。ミッチャー少将はこの命令を受け、ガダルカナルのP-80戦闘機航空隊から十六人、第七十戦闘中隊から二人のパイロットを選び抜いた。指揮官はジョン・ミッチェル少佐である。

ミッチェル少佐はただちに作戦の立案に取りかかり、十八機を二手に分けることを考えた。

山本長官搭乗機には相当数の護衛機が付くであろう。そこで十四機が護衛機を攪乱している間に、あらかじめ飛行予定コース上に待ち受けた四機が山本長官搭乗機をねらう。必殺の一撃を加え、ただちに退去する。

同日、日本海軍航空基地は山本五十六連合艦隊司令長官の詳細な行動予定を暗号で交信した。この電波は、アリユーシヤン列島の米海軍無線基地で補足され、ハルゼー米南太平洋部隊司令官に報告された。それによると、

——山本長官は午前八時にラバウルを出発し、同九時四十五分にパラレ基地到着の予定。

という。

翌十八日未明、ハルゼー中将はガダルカナル島のミッチャー少将に指示を与えた。

孔雀八時間通り行動スルモノト思ワレル  
尻尾ヲ団扇デアオラレタシ

というものだった。

「孔雀」とは、すなわち山本五十六である。

四月十八日未明、ガダルカナル島のアメリカ軍基地から十八機のP-38が離陸した。うち二機が故障のため途中で引き返した。刺客は十六人に減った。

護衛の対象は二機の一式陸攻である。一機に山本五十六連合艦隊司令長官が、もう一機に宇垣纏参謀長が乗った。

日本のラバウル航空基地は最初、零戦二十機で護衛する予定だった。ところが山本長官が、

「たかが護衛のために、大切な零戦をそんなに飛ばす必要はない」  
と言った。

そこで護衛の零戦は六機に減らされた。

午前九時三十四分、山本連合艦隊司令長官を乗せた一式陸攻がブーゲンビル島上空にさしかかったとき、十六機のアメリカ軍機が襲いかかった。護衛が二十機であれば——と言っても、「覆水盆に返らず」のことわざがある。

山本長官が乗った一式陸攻に射撃を加えたのは、トーマス・ランフィアという大尉である。

アメリカ軍が「ライター」と呼んだように、防弾・防火装備を持たない一式陸攻は、あつという間に翼の付け根から火を吹いてジャングルに墜落した。

ただちに捜索隊が編成され、同日夕刻、山本五十六大将の死が確認された。

発見したのは歩兵第二十三連隊道路設営隊長・浜砂盈栄少尉だった。

軍刀ヲ左手ニテ握リ、右手ヲソレニ副工、機体ト略々並行ニ頭部ヲ北ニ向ケ、左側ヲ下ニシタ姿勢デ居ラレマシタ。御遺骸ノ下ニハ座席クツシヨシヲ敷キ、少シモ焼ケテハ居ラレマセンデシタガ、左胸部ニ敵弾ガ当ッタモノノ様デ血

ガ流レテ居リマシタ。他ノ方ノ遺骸ハ全部腐敗シテ、殆下  
全身ニ蛆ガ湧イテ居リマシタガ、御遺骸ノミハ僅カニ口ト  
鼻ノ付近ニ蛆ガ湧イテイル程度デアリマシタ。



## 補注

ソロモン海戦 ソロモン海はニューギニア島東部からオーストラリア北部の珊瑚海につながり、ソロモン諸島とニューカレドニア島、フィジー島などで囲まれる海域。ガダルカナル島における陸戦に関連して、日本軍と米・豪連合軍が三度にわたって戦った。第一次…一九四二年八月八・九日。サボ沖海戦、ツラギ夜襲戦とも呼ばれる。オーストラリアの重巡洋艦キャンベラ、アメリカの重巡洋艦アストリア、クインシー、ヴェンセンスを撃沈し、重巡洋艦シカゴ、駆逐艦ラルフ・タルボット、バターソンが大破するなど日本軍の勝利となった。

第二次…一九四二年八月二十四日。この海戦のあと同年十月十三日、日本海軍の戦艦金剛、榛名などがヘンダーソン飛行場を艦砲射撃で攻撃した。

第三次…一九四二年十一月十二～十五日。ガダルカナル島に上陸した日本陸軍第三十八師団への物資補給を阻止しようとした米豪連合軍によって、日本海軍が惨敗を喫した。輸送船十一隻約七万七千トンを喪失したことにより、陸軍は民間船舶の追加徴用に動くことになった。

## ノルマンディ海岸 Normandy

ドーバー海峡のフランス側、ル・アーブルとカーンの間にある海岸で、連合国軍の反攻上陸作戦が行われた。映画『地上最大の作戦』で知られる。ここが反攻上陸作戦に選ばれたのは近くにあるコタンタン半島のシェルブルール港が物資補給の拠点として適していたこと、海岸から内陸まで平坦な土地が続いていることなどだ

った。

ついでながら、この地名はノルウェー王室からイングリッド王室に嫁いだ王妃の子孫が「ノルマンディ公」と称され、英仏百年戦争のときフランスに上陸して占領し、わが領地としたことに始まる。

海軍一式陸上攻撃機 九六式陸上攻撃機の燃料タンクをインテグラル・タンク式に改良して航続距離を延ばした。インテグラル・タンクというのは翼を密閉してそこに六千リットルの燃料を注入するものだった。このため翼に被弾するとたちまち火災が発生し、あるいは爆発した。アメリカ軍はその弱点を見抜いて翼の付け根に照準を合わせた。一撃ですぐに火がつくことから「ワンショット・ライター」と呼ばれた。

P-38 戦闘機 通称は「ライトニング」(稲妻)。ロッキード社が設計・開発した双胴型高速戦闘機で、一九三九年に米陸軍に制式採用された。二基のエンジンを搭載し最高速度六六〇キロ/時、航続距離四〇〇〇キロ、搭載できる爆弾は最大九〇〇キログラムだった。空中戦では日本の零戦に敵わなかったが、防御性能と破壊力が高く評価され、ヨーロッパ戦線でも使用された。『星の王子さま』の著者であるサン・テグジュペリが偵察任務で用いていたことでも知られる。

山本五十六の死 その死は一か月以上秘匿され、五月二十一日にようやく大本営が発表した。同年六月五日、東京・日比谷公園で国葬が行われた。護衛の使命を果たせなかった六人はその後、激戦の最前線に送り込まれて五人が戦死、右手首を失って退役した一人のみが生き残った。

# 日本IT書紀 068 寂寥

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。